

坂口安吾

デカダダン文学論



デカダン文学論

極意だの免許皆伝などというのは茶とか活花いけばなとか忍術
 とか剣術の話かと思っっていたら、関孝和せきたかかずの算術などで
 齋戒沐浴さいかいもくよくして血判を捺おし自分の子供と二人の弟子以外に
 は伝えないなどとやっている。もつとも西洋でも昔は最
 高の数理を秘伝視して門外不出の例はあるそうだが、日
 本は特別で、なんでも極意書ときて次に齋戒沐浴、いわ
 く言いがたしとくる。私はタバコが配給になって生まれ
 て始めてキザミを吸ったが、昔の人間だって三服四服は

つづけさまに吸ったはずで、さすればガン首の大きいパイプを発明するのが当然のはずであるのに、そういう便利な実質的な進歩発明という算段は浮かばずに、タバコは一服吸ってポンと叩く^{たた}ところがよいなどというフザけた通が生まれ育ち、現実には停止して進化が失われ、その停止をもてあそんでフザけた通や極意や奥義書が生まれて、実質的な進歩、ガン首を大きくしろというような当然な欲求は下品なもの、通ならざる俗なものと考えられてしまうのである。キセルの羅宇^{らう}は仏印ラオス産の竹、羅宇竹から来た名であるが、キセルは羅宇竹に限るなど

と称してますます実質を離れて枝葉に走る。フォークをひっくりかえして無理にむつかしく御飯をのせて変てこな手つきで口へ運んで、それが礼儀上品なるものと考えられて疑われもしない奇妙奇天烈きてれつな日本であった。実質的な便利な欲求を下品と見る考えは随所にさまざまな形でひそんでいるのである。

この歪ゆがめられた妖怪的な日本的思考法の結び目に当たる伏魔殿が家庭感情という奴で、日本式建築や生活様式に規定された種々雑多な歪みはとにかくとして、平野謙などというよく考える批評家まで、特攻隊は女房があつ

てはできないね。などとフザけたことを鶺^う呑みにして疑ぐることにすらないのである。女房と女と、どこが違うのだろう。女房と愛する人とどこに違いがあるというのか。誰か愛する人なき者ありや。鐘の音がボーンと鳴ってその余韻の中に千万無量の思いがこもっていたり、その音に耳をすまして二十秒ばかりで浮世の垢^{あか}を流したり、海苔^{のり}の裏だか表だかのどっちか側から一方的にあぶらないと味がどうだとか、フザけたことにかかずらって何百何千語の註釈をつけたり、果ては奥義書や秘伝を書くのが日本的思考のあり方で、近ごろは女房の眉^{まゆ}を落させた

りオハグロをぬらせることはなくなつたが、いれずみ刺青とたいして異ならないかかる野蛮な風習でもそれが今日残存して現実の風習であるなら、それを疑ぐるよりも、奥義書を書いて無理矢理に美を見いだし、疑ぐる者を俗なる者、野卑にして素朴なる者ときめつけるのが日本であつた。女房のオハグロは無くなつたが、オハグロ的マジナイは女房の全身、全心、魂の奥底にまで絡みついて生きており、それがまず日本の幽霊の親分で、平野謙のように私などよりも考える時間がよほど多いらしい人ですら、人間の姿をもらもろの幽霊からほんとうに絶縁しようとい

うだいな根本的な態度を忘れ、多くは枝葉について考
える時間が多いのではないかと思う。彼は人の小説を厭
になるほどたくさん読むが、僕が三行読んで投げ出すも
のを彼は三千万語の終わりまで無理に読み、無理に幽霊
をでっちあげ、そして自分のほんとうの心と真に争う、
自分の幽霊と命を賭^としても争うというだいなたった一
つのが忘れられているのだ。

日本の家庭感情の奇怪な歪みは浮世においては人情義
理という怪物となり、離俗の世界においてはサビだの幽
玄だのモノノアワレなどという神秘の扉の奥に隠れてい

わく言いがたきものとなる。ポンと両手を打ち鳴らして、右が鳴ったか左が鳴ったかなどと言つて、人生の大真理がそんな所に転がっていると思ひ、大將軍大政治家大富豪ともならん者はそういう悟りをひらかなければならぬいなどと、こういうフザけたことが日本文化の第一線に堂々通用しているのである。西洋流の学問をして実証精神の型がわかるとこういう一見フザけたことはすぐ気がつくが、つけ焼刃で、根柢的に日本の幽霊を退治したわけではなく、むしろ年とともに反動的な大幽霊とみずから化して、サビだの幽玄だのますます執念を深めてしま

う。学問の型を形のごとくに勉強するが、自分自身というものについて真実突きとめて生きなければならぬという唯一のものが欠けているのだ。

毎々平野謙を引き合いにして恐縮だが、先頃ごろの労作二百余枚の「島崎藤村の『新生』に就て」を読んだからで、他の批評家先生は駄文ばかりで、いかさま私が馬鹿げたヒマ人でも駄文を相手にするわけには行かない。

「新生」の中で主人公が自分の手をためつすかしつ眺めて、この手だな、とか思い入れよろしくわが身の罪の深さを思うところが人生の深処にふれているとか、鬼気せ

まるものがあるとか、平野君、フザけたもうな。人生の深処かがそんなアンドンの灯の翳かげみたいなのボヤけたところころがつついていて、たまるもんか。そんなところは藤村の人を甘く見たゴマ化し技法で、いちばんよくないところだ。むしろ最も軽蔑けいべつすべきところである。こんなふうに書けば人が感心してくれると思つて書いたに相違ないところで、第一、平野君、自分の手をつくづく眺めてわが身の罪の深さを考える、具体的事実として、それがいいつたい、何物です。

自分の罪を考える、それが文学の中で本当の意味を持

つのは、具体的な行為として倫理的に発展して表われるところにあるので、手をひっくり返して眺めて鬼気迫るなどとはボーンという千万無量の鐘の思いと同じこと、海苔をひっくり返して焼いて、味がどうだというような日本の幽霊の一匹にすぎないのである。

島崎藤村は誠実な作家だというけれども、実際は大いに不誠実な作家で、それは藤村自身と彼の文章（小説）との距離というものを見ればわかる。藤村と小説とは距へだたりがあつて、彼のわかりにくい文章というものはこの距離をごまかすための小手先の悪戦苦闘で魂の悪戦苦闘と

いうものではない。

これと全く同じ意味の空虚な悪戦苦闘をしている人に横光利一があり、彼の文学的懊惱おうれうだの知性だのというものは、距離をごまかす苦悩であり、もしくは距離の空虚が描きだす幻影的自我の苦悩であって、彼には小説と重なり合った自我がなく、したがって真実の自我の血肉のこもった苦悩がない。

このように、作家と作品に距離があるということは、その作家が処世的にいかほど糞マジメくそで謹厳誠実であつても、根柢的に魂の不誠実を意味している。作家と作品

との間に内容的には空白な夾きょうざつ雑物があつて、その空白な夾雑物が思考し、作品をあやつり、あまつさえ作家自体、人間すらもあやつっているのだ。平野謙には、この距離がわからぬばかりでなく、この距離自体が思考する最も軽薄なヤリクリ算段が外形的に深刻真摯しんしであるのを、文学の深さだとか、人間の複雑さだとか、藤村文学の貴族性だとか、または悲痛なる弱さだとか、たとえばそのような考えているのである。

藤村は世間的処世においては糞マジメな人であつたが、文学的には不誠実な人であつた。したがって彼の誠

実謹厳な生活自体が不健全、不道德、にせもの贗物であつたと私は思う。

彼は世間を怖れていたが、文学を甘くみくびっていた。そして彼は処世的なマジメさによって、真実の文学的懊惱、人間的懊惱を文章的に処理しようとし、処理し得るものと夕力をくくっていた。したがって彼は真実の人間的懊惱を真に悩みまたは突きとめようとはせず、ただ処世の便法によって処理し、終生みずからの肉体的な論理によって真実を探求する真の自己破壊というものをおよそ影すらも行いはしなかった。

距離とは、人間と作品の間につまるこの空白をさすの
であり、肉体的な論理によって血肉の真実が突きとめら
れ語られていないことを意味している。こう書けば、こ
う読み、こう感心するだろうぐらいに、批評家先生など
は最も舐め^なられていたのである。批評家をだますぐらい
わけのないことはない。批評家は作家と作品の間の距離
などはわからず、当人自身の書くものが距離だらけで、
距離をごまかすためのヤリクリが文学のむつかしいここ
ろだぐらいに考えており、藤村ほどの不器用な人でも批
評家とはケタの違う年期のはいった筆力があるから、批

評家をごまかすぐらいはわけがない。問題はいかに生くべきか、であり、しかしていかに真実に生きているか、文章に隠すべからざる距離によって作家は秘密の真相を常に暴露しているのである。

藤村も横光利一も糞マジメでおよそ誠実に生き、かりそめにも遊んでいないような生活態度に見受けられる。世間的、また、態度的には遊んでいないが、文学的には全く遊んでいるのである。

文学的に遊んでいる、とは、彼らにとって倫理はみず

から行なうことではなく、論理的にもてあそばれているにすぎないということ、要するに彼らはある型によって思考しており、肉体的な論理によって思考してはいないことを意味している。彼らの論理の主点はそれみずからの合理性ということ、理論自体が自己破壊を行なうことも、盲目的な自己展開を行なうこともあり得ないものである。

かかる論理の定型性というものは、一般世間の道德とか正しい生活などと称せられるものの基本をなす贗物の生命力であって、すべて世の謹厳なる道德家だの健全な

る思想家などというものは例外なしに贗物と信じてさしつかえはない。ほんとうの倫理は健全ではないものだ。そこには必ず倫理自体の自己破壊が行なわれており、現実に對する反逆が精神の基調をなしているからである。

藤村の「新生」の問題、叔父と姪との関係は問題自体は不健全だが、小説自体は馬鹿馬鹿しく健全だ。この健全とは合理的だということ、自己破壊がなく、肉体的な論理の思考がない代わりに、型の論理が巧みに健康に思考しているという意味なのである。

藤村が眞実怖れ悩んでいることは小説には表われてい

ない。それにまた、彼が眞実怖れ悩んでいることは決して文学自体の自己探求による悩みではなく、単に世間と
いうことであり、対世間、対名誉、それだけの「健康」
なものであった。彼はちようど、たとえば全軍の先頭に死
なざるを得なかつた將軍の場合と同じように（この將軍
がほんとうは死を怖れていることは敗戦後我々は多すぎ
る実例を見せられてきた）藤村も勇をふるつて己れと姪
との關係を新聞に発表した。けれども將軍の遺書が尽忠
報国の架空の美文でうめられていると同様に、彼の小説
は型の論理で距離の空白をうめているにすぎない。

なにゆえ彼は「新生」を書いたか。新しい生の発見探求のためであるにはあまりにも距離がひどすぎる。彼はそれを意識していなかったかもしれない。そして彼は自分では真実「新生」の発見探求を賭けているつもりであつたかもしれないのだが、いかんせん、彼の態度は彼自身をすらあざむいており、彼が最も多く争つたのは文学のための欲求ではなく、彼は名誉と争い、彼みずからをも世間と同時にあざむくために文学を利用したのだと私は思う。私がこれを語っているのではなく、「新生」の文章の距離自体がこれを語っているのである。彼は告白す

ることによつて苦惱が軽減し得ると信じ、苦惱を軽減し得る自己救済の文章を工夫した。作中の自己を苦しめる場合でも、自分を助ける手段でしかなかつた。彼は眞にわが生き方の何物なりやを求めていたのではなく、ただ世間の道德の型の中で、世間を相手に、ツジツマの合つた空論を弄ろうして大小説らしき外見の物を書いてみせただけである。これも彼の文章の距離自体が語っているのである。

彼がどうして姪という肉親の小娘と情欲を結ぶに至るかというと、彼みたいに心にもない取り澄まし方をして

いると、知らない女の人を口説く手掛りがつかめなくなる。彼が取り澄ませば女の方はよけい取り澄まして応じるものであるから、彼は自分のポーズを突きぬけて失敗するかもしれない。口説くぜつにのりだすだけの勇気がないのだ。肉親の女にはその障壁がないので、藤村はポーズを崩す怖れなしにかなり自由にまた自然にポーズから情欲へ移行することができやすかったのだと思う。

彼は姪と関係してその処理に苦しむことよりも、ポーズを破って知らない女を口説く方がもっとできにくかったのだ。それほど彼はポーズに憑つかれており、彼は外

形的にいかにも新しい道徳を探しもとめているようであるが、芸者を芸者とよばないで何だか妙な言い方で呼んでいるというだけの、全く外形的な、内実ではより多くの例の「健全なる」道徳に呪縛じゆばくせられて、自我の本性をポーズの奥に突きとめようとする欲求の片鱗へんりんすらも感じてはいない。眞実愛する女をなぜ口説くことができな
いのか。姪と關係を結んで心ならずも身にふりかかった
処世的な苦惱しつように対して死に物ぐるいで処理始末のできる
執拗しつような男でいながら、身にふりかかった苦惱には執拗に
堪え抵抗し得ても、みずからのほんとうに欲する本心を

見定めて苦悩にとびこみ、自己破壊を行なうという健全なる魂、執拗なる自己探求というものはなかつたのである。

彼は現世に縛られ、通用の倫理に縛られ、現世的に墮落ができなかつた。文学の本来の道である自己破壊、通用の倫理に対する反逆は、彼にとっては墮落であつた。

私はしかし彼が眞実欲する女を口説き得ず姪と関係を結ぶに至つたことを非難してゐるのではない。人おのおの個性によるいかなる生き方もありうるので、眞実愛する人を口説き得ぬのも仕方がないが、なぜ藤村がみずか

らの小さな真実の秘密を自覚せず、その悲劇を書き得ず
に、空虚な大小説を書いたかを咎とがめているだけのことで
ある。芥川が彼を評して老獺ろうかいと言ったのは当然で、彼の
道徳性、謹厳誠実な生き方は、文学の世界においては欺
瞞であるにすぎない。

藤村は人生と四ツに組んでいるとか、最も大きな問題
に取り組んでいるとか、欺瞞にみちた魂が何者と四ツに
組んでも、それはただ常に贗物であるにすぎない。バル
ザックが大文学でモオパッサンが小文学だという作品の
大小論はフザけた話である。藤村は文学を甘く見ていた

から、こういう空虚軽薄な形だけの大長篇をオカユをすすって書いていられたので、贗物には楽天性というものはない。常にホンモノよりも深刻でマジメな顔をしていゝるものなのである。いつか銀座裏の酒場に坂口安吾のニセモノが女を口説いて成功して、他日無能なるホンモノが現われたところ、女どもは疑わしげに私を眺めて、あなたにホンモノなのかしら。ニセモノはもつとマジメな深刻な人だったわよ、と言った。

*

私は世のいわゆる健全なる美德、清貧だの儉約の精神だの、困苦欠乏に耐える美德だの、謙讓の美德などというものはみんな嫌いきらいで、美德ではなく、悪徳だと思つて
いる。

困苦欠乏に耐える日本の兵隊が困苦欠乏に耐え得ぬアメリカの兵隊に負けたのは当然で、欠乏の美德という日本精神自体が敗北したのである。人間は足があるからエレベーターでたった五階六階まで登るなどとは不健全であり墮落だという。機械によって肉体労働の美德を忘れ

るのは墮落だという。こういうフザけた退化精神が日本の今日のみごとな敗北をまねいたのである。こういう馬鹿げた精神が美德だなどと疑ぐられもしなかつた日本は、どうしても負け破れ破滅する必要があつたのである。しかし、働くことは常に美德だ。できるだけ楽に便利に能率的に働くことが必要なだけだ。ガン首の大きなパイプを発明するだけの実質的な便利な進化を考え得ず、一服吸ってポンと叩く心境のサビだの美だのと下らぬことに奥義書を書いていた日本の精神はどうしても破滅する必要があつたのだ。

美しいもの、楽しいことを愛するのは人間の自然であり、ゼイタクや豪奢ごうしゃを愛し、成金は俗悪な大邸宅をつくつて大いに成金趣味を發揮するが、それが万人の本性であつて、毫ごうも輕蔑すべきところはない。そして人間は、美しいもの、楽しいこと、ゼイタクを愛するように、正しいことをも愛するのである。人間が正しいもの、正義を愛す、ということとは、同時にそれが美しいもの、楽しいもの、ゼイタクを愛し、男が美女を愛し、女が美男を愛することなどと並立して存するゆえに意味があるので、悪いことをも欲する心と並び存するゆえに意味があるので、人

間の倫理の根元はここにあるのだ、と私は思う。

人間が好むものを欲しもとめ、男が好きな女を口説くことは自然であり、当然ではないか。それに対してイエスとノーのハッキリした自覚があればそれで良い。この自覚が確立せられず、自分の好悪、イエスとノーもハッキリ言えないやうな子供の育て方の不健全さというものは言語道断だ。

処女の純潔などというけれども、いっこうに実用的なものではないので、失敗は成功の母と言ひ、失敗は進歩の階段であるから、処女を失うぐらい必ずしも咎むべき

ではなかろう。純潔を失うなどと言って、ひどい墮落のようになりこませるから罪悪感によって本格的に墮落を辿るようになるので、これを進歩の段階と見、より良きものを求めるための尊い捨て石であるような考え方生き方を与える方がほんとうだ。より良きものへの希求が人間に高さや品位を与えるのだ。単なる処女のごとき何物でもないではないか。もつとも無理にすて去る必要はない。要は、魂の純潔が必要なだけである。

失敗せざる魂、苦悩せざる魂、そしてより良きものを求めざる魂に真実の魅力はすくない。日本の家庭という

ものは、魂を昏酔させる不健康な寢床で、純潔と不変という意外千万な大看板をかかげて、男と女が下落し得る最低位まで下落してそれが他人でない証拠なのだと思うている。家庭が娼婦の世界によって簡単に破壊せられるのは当然で、娼婦の世界の健康さと、家庭の不健康さについて、人間性に根ざした究明がまた文学の変わらざる問題の一つが常にこのことに向って行なわれる必要がある。たはらずだと私は思う。娼婦の世界に単純明快な真理がある。男と女の真実の生活があるのである。だましあい、より美しくより愛らしく見せようとし、実質的に自分の

魅力のなかで相手を生活させようとする。

別な女に、別な男に、いつ愛情がうつるかもしれないということの中には人間自体の発育があり、その関係は元来健康なはずなのである。しかしなるべく永遠であろうとすることも同じように健康だ。そして男女の価値の上に、肉体から精神へ、また、精神から肉体へ価値の変化や進化が起こる。価値の発見も行なわれる。そして生活自体が発見されているのである。

問題は単に「家庭」ではなしに、人間の自覚で、日本の家庭はその本質において人間が欠けており、生殖生活

と巢を営む本能が基礎になっているだけだ。そして日本の生活感情の主要な多くは、この家庭生活の陰鬱いんうつさを正義化するために無数のタブーをつくっており、それがまた思惟や思想の根元となつて、サビだの幽玄だの人間よりも風景を愛し、庭や草花を愛させる。けれども、そういう思想が贗物にすぎないことは彼ら自身が常に風景を裏切っており、日本三景などというが、私は天の橋立と云うところへ行つたが、遊覧客の主要な目的はミヤジマの遊びであつたし、伊勢大神宮参拝の講中が狙っているのも遊び場で、伊勢の遊び場は日本において最も淫靡いんびな

遊び場である。もつとも日本の家庭が下等愚劣なものであると同様に、これらの遊び場にもただ女の下等な肉体がころがっているにすぎないのである。

夏目漱石という人は、彼のあらゆる知と理を傾けて、こういう家庭の陰鬱さを合理化しようと思ふ不思議な努力をした人で、そして彼はただ一つ、その本来の不合理を疑ぐることを忘れていた。つまり彼は人間を忘れていたのである。かゆい所に手がとどくとは漱石の知と理のことである。よくもまあこんなことまで一一気がつくものだと思うばかり、家庭の封建的習性というもののあらゆる枝葉

末節のつながりへ、万べんなく思惟がのびて行く。だが習性の中にもあるはずの肉体などは一顧も与えられておらず、何よりも、本来の人間の自由な本姿が不問に付されているのである。人間本来の欲求などは始めから彼の文学の問題ではなかった。彼の作中人物は学生時代のつまらぬことに自責して、二三十年後になって自殺する。奇想天外なことをやる。そのくせ彼のたいがいの小説の人物は家庭的習性というものにギリギリのところまで追いつめられているけれども、離婚しようという実質的な生活の生長について考えを起こした者すらないのであ

る。彼の知と理は奇妙な習性の中で合理化という遊戯にふけっただけで、真実の人間、自我の探求というものは行なわれていない。自殺などというものは悔恨の手段としてはナンセンスで、三文の値打もないものだ。より良く生きぬくために現実の習性的道德からふみはずれる方がはるかに誠実なものであるのに、彼は自殺という不誠実なものを誠意あるものと思い、離婚という誠意ある行為を不誠実と思い、このナンセンスな錯覚を全然疑ぐることがなかった。そして悩んで禅の門を叩く。別に悟りらしいものもないので、そんなら仕方がないと諦め

る。物それ自体の實質に就てギリギリのところまで突きとめはせず、宗教の方へでかけて、そつちに悟りがないというので、物それ自体の方も諦めるのである。こういう馬鹿げたことが悩む人間の誠実な態度だと考えて疑ぐることがないのである。日本一般の生活態度が元来こういうフザけたもので、漱石はただその中で銜げん学的な形ばかりの知と理を働かせてかゆいところを搔かいてみただけで、自我の誠実な追求はなかった。

もとより人間は思いどおりに生活できるものではない。愛する人には愛されず、欲する物はわが手に入らず、

手の中の玉は逃げ出し、希望の多くは仇夢で、人間の現実は努力するところに人間の生活があるのであり、夢は常にくずれるけれども、諦めや慟哭どうこくは、くずれ行く夢自体の事実の上であり得るので、思惟として独立に存するものではない。人間はまず何よりも生活しなければならぬもので、生活自体が考えるとき、始めて思想に肉体が宿る。生活自体が考えて、常に新たな発見と、それ自体の展開をもたらしてくれる。この誠実な苦悩と展開が常識的に悪であり墮落であっても、それを意とするには及ばない。

私はデカダンス自体を文学の目的とするものではない。私はただ人間、そして人間性というものの必然の生き方をもとめ、自我みずからを欺くことなく生きたい、というだけである。私が憎むのは「健全なる」現実の贋道徳で、そこから誠実なる墮落を怖れないことが必要であり、人間自体の偽らざる欲求に復帰することが必要だというだけである。人間はもろもろの欲望とともに正義への欲望がある。私はそれを信じ得るだけで、その欲望の必然的な展開については全く予測することができない。

日本文学は風景の美にあこがれる。しかし、人間にとって、人間ほど美しいものがあるはずはなく、人間にとつては人間が全部のものだ。そして、人間の美は肉体の美で、キモノだの装飾品の美ではない。人間の肉体には精神が宿り、本能が宿り、この肉体と精神が織りだす独得の^{あや}絢は、一般的な解説によって理解し得るものではなく、常に各人各様の発見が行なわれる永遠に独自なる世界である。これを個性といい、そして生活は個性によるものであり、元来独自のものである。一般的な生活はあり得ない。めいめいが各自の独自の生活をして誠実な生活を

もとめることが人生の目的でなくて、他の何物が人生の目的だろうか。

私はただ、私自身として、生きたいだけだ。

私は風景の中で安息したいとは思はない。また、安息し得ない人間である。私はただ人間を愛す。私を愛す。私の愛するものを愛す。徹頭徹尾、愛す。そして、私は私自身を発見しなければならぬように、私の愛するものを発見しなければならぬので、私は堕ちつづけ、そして、私は書きつづけるであろう。神よ、わが青春を愛する心の死に至るまで衰えざらんことを。

日本文学電子図書館

墮落論

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店
昭和45年1月30日 改版3刷



日本文学電子図書館